2022年10月23日  川越教会

丸山　勉

わたしはあなたの中に

［詩編139編13～24節］

あなたは、わたしの内臓を造り 母の胎内にわたしを組み立ててくださった。

わたしはあなたに感謝をささげる。わたしは恐ろしい力によって  
驚くべきものに造り上げられている。御業がどんなに驚くべきものか  
わたしの魂はよく知っている。 

秘められたところでわたしは造られ 深い地の底で織りなされた。

あなたには、わたしの骨も隠されてはいない。 

胎児であったわたしをあなたの目は見ておられた。わたしの日々はあなたの書にすべて記されている まだその一日も造られないうちから。 

あなたの御計らいは わたしにとっていかに貴いことか。神よ、いかにそれは数多いことか。 数えようとしても、砂の粒より多く その果てを極めたと思っても わたしはなお、あなたの中にいる。 

どうか神よ、逆らう者を打ち滅ぼしてください。わたしを離れよ、流血を謀る者。 たくらみをもって御名を唱え あなたの町々をむなしくしてしまう者。 

主よ、あなたを憎む者をわたしも憎み あなたに立ち向かう者を忌むべきものとし  激しい憎しみをもって彼らを憎み 彼らをわたしの敵とします。

神よ、わたしを究め わたしの心を知ってください。わたしを試し、悩みを知ってください。 

御覧ください わたしの内に迷いの道があるかどうかを。どうか、わたしを とこしえの道に導いてください。

[１] しばしの別れ

この朝の礼拝は、先にこの地上の生涯を終えた人々の生きざまのことも思い起こしながら、「永眠者記念礼拝」を守っています。週報の中にございますが、皆様のご家族やご兄弟、またご存じのお名前がそこにあったり、またそうでなくても、私などもそうですが、最近身近な者を天に送った、という経験をお持ちの方もおられると思います。「死」は別れでありますから、悲しいことです。でも、こう思うことも許されるのではないでしょうか。「死は別れだ。しかしそれは、しばし（ひと時）の別れだ」と。

「永眠（者）」という言葉も、私自身今ひとつしっくりこないものを感じていまして（牧師の者がこのようなことを言ってはいけないかもしれませんが）、私たちの感覚からして、永遠に眠り続けるのであれば、ちょっと捉え難いと言いますか、どんな意味があるんだろうと思ってしまいます。眠りとは、覚めるべき時があるので、眠りに意味があるのではないかと思うのです。それは、私たちが「モノ」のような無機質な存在ではないということが大前提としてあるからだと思うのです。

　私たちには、「いのち」が宿っています。ところがこの「いのち」って何なの？と言われれば、説明はとても難しいと思います。宿っている「いのち」というのは、手に持って見せることが出来ないものですよね。それは自分の中にありながら、自分に「与えられた」もの、賦与されたものだと思うのです。でもこれは実証出来ません。けれども私はそれを‟信じる”ように招かれていると思っています。「あなたにいのちを与えた方がいる。あなたは、たまたま生まれたのはない。あなたは大きな意志のもとに、この世界に望まれて誕生した存在なのだ」と。

［２］　「I was born」

聖書は、古代の時代から、神様と人との関わりが書かれた他に類がない書物だと言えます。今日ご一緒に味わいたい詩編139編の言葉は、とても愛されている詩編の一つでもありますし、旧約聖書全体の中でも、その神観についての代表的資料として、神学的にも信仰的にも特別な価値を有する詩だと言われています。読めば読むほど深い味わいに包まれる詩編ですね。この詩は「わたし」という一人称で書かれている個人的な詩ですが、自分の内面を見つめて嘆いているのではなく、「いのち」の神秘や不思議さに思いをめぐらし、そのいのちの与え主である神に圧倒されている、そのような詩人の心が伝わってきます。神様のことが「分かった」というのではなく、繰り返しますが、圧倒されているのです。6節では「その驚くべき知識は私を超え、あまりにも高くて到達できない」と語っています。

この詩で詩人は、何が一番言いたいのかなと考えると、「驚き」を共有したいのではないかと思いました。私たちもそういうことあると思います。凄いことは分かち合いたいと思うものです。それがこの世に教会があるということの意味でもあると思のですが、この詩人はこの詩を歌うことで、周りの者たちに、自然に、神様の中にある自分という存在を「証し」ているのだと思います。13節から16節までもう一度味わってみましょう。ここには「わたし」という自分のいのちの始まりについて、驚きと喜びをもって、このように記しています。

「あなたは、わたしの内臓を造り 母の胎内にわたしを組み立ててくださった。わたしはあなたに感謝をささげる。わたしは恐ろしい力によって　驚くべきものに造り上げられている。御業がどんなに驚くべきものか　わたしの魂はよく知っている。秘められたところでわたしは造られ　深い地の底で織りなされた。あなたには、わたしの骨も隠されてはいない。 胎児であったわたしをあなたの目は見ておられた。わたしの日々はあなたの書にすべて記されている まだその一日も造られないうちから。 」

ここでは「生まれる」という言葉は使われていません。私たちは「赤ちゃんとして生まれてきて」とか言うことがありますけれども、それは正確ではないのですね。面白いことに、英語で「生まれる」という言葉は受身形です。「I was born」です。この詩でも、「秘められたところでわたしは造られ　深い地の底で織りなされた」とありますが、ここで言われていることは大変なことで、「いのち」の創造者がおられ、それ故にわたしという存在がある！ということなのです。いのちは風のようにふわふわしたものでなく、神様という根っこがあると言うのです。

［３］ 神様が下さるいのちに終わりなない

「いのち」ということを考える中で、最近私が良く思うのは、「種」の不思議さです。たとえば今の季節の野菜だったらかぼちゃ。小さな種粒ですよね。けれども、あんなにずっしりと、そして甘いカボチャになる。種が土の中に隠されると、いつの間にか芽がでて、花が咲き、受粉すると実が付き、何週間もすると、重量感のある見事なかぼちゃになります。…私たちも「種」なんだと思います。どこに蒔くかという以前に、種そのものがまるで奇跡のようなものですよね。園芸や畑仕事をなさる方は実感されるでしょう。あんなにちっぽけな、風にも飛ばされてしまうようなものですけれども、その種の中に「いのちのエキス」とも言うべきものが詰まって、隠されている。そして種は、土地と、水と、光が与えられることによって（それもみんな神様が作られたものですけれども）実をつけるんです。そのプロセスは人間には隠されているけれども、種の中には「いのち」があり、その見えない力自体が神秘ですし、尊いと思います。神様も私たち一人ひとりを「形造って」下さったのだと聖書は語ります。私のいのちは、私が握っているのではなくて、神様が造り、配慮して下さっているいのちなんだ、それをこの詩人は確信を持って歌っていました。一番最初の1節からこれ以上ない告白を語っています。「主よ、あなたは私を究め、わたしを知っておられる。」 ―神様は私を知り尽くしていると。惨めな私、落ち込む私、病を抱えている私、死におびえる私、許しを乞うている私…。そういう私を本当に受け入れて下さるお方、神様がいる。この方の前では私たちは本当にあるがままになれるのだと思います。弱さをなるべく隠すような信仰の優等生ぶることがなくても良いのだと思いました。どんな私であろうが、18節で語られているように「わたしはなお、あなたの中にいる」のですから。

私は最近、自分の信仰はどこか間違っていたのではないかな、と思うのです。自分ではそれほど意識していなくても、どこか人よりも優れた者と見てもらいたいとか、或いは上昇志向の生き方の延長線上に自分の信仰があったのではないかと思うのです。自分で一生懸命、造花の、作り物の種から芽を出させようとしていたのではないかと。しかしそれは無理です。本当にみ言葉からいのちを貰わなければ。神様はまことの農夫なのです。このお方が土地を耕し、種が出るようにして下さる。自分の力じゃない。自分の力というのは、実を結ばないのです。イエス様の譬え話にあるように、道端、石地、茨の中で、枯れたり、塞がれたりしてしまう。私たちは、本当に自分自身のいのちをお委ねしていきたいと思う。お委ねしていいのですね！先に主のもとに召された方たちのように。しかしまたこの先人たちもあるがままの、神様に造られた者たちです。色々な弱さもお持ちだったでしょう。この詩編でも19節から22節は激しい神への訴えが綴られています。「どうか神よ、逆らう者を打ち滅ぼして下さい…」と。こういう訴えも生きて行く上で大事ではないでしょうか。神様に体当たりしてゆく。私たちのぶつける神様への訴えを全部聴いて下さるために、神様はイエス様を、私たちと共に歩んで下さる神様として送って下さったのだ。私はそう思うのです。

私たちの地上のいのちも、やがて隠れて行くことがあるでしょう。「永眠」というのはそれかもしれません。しかし、神様が下さるいのちに終わりはないのです。「わたし」として造って下さったこのいのちは、必ずまた呼び覚まされる時が来る。文字通り復活の主の栄光に与る日でしょう。ですから別れは、「しばし」のお別れでしかないと思います。罪多きお互いが、主によって赦されているのです。それぞれの中に与えられている尊いいのちの種を愛してゆきたいと思います。誰かとの比較ではなく、あるがままのいのちとして、主のもとに帰るその日まで。最後に、詩編139編の23と24節を、私たちの共通の祈りと致しましょう。

「神よ、わたしを究め わたしの心を知ってください。わたしを試し、悩みを知ってください。 御覧ください　わたしの内に迷いの道があるかどうかを。どうか、わたしを　とこしえの道に導いてください。」

この祈りを、主イエス・キリストの御名によってお捧げ致します。アーメン。